

アート・オブ・ ベースボール



スポーツ文化評論家 玉木 正之

(3)

アメリカを代表する作家の一人 小説『素晴らしいアメリカ野球』
フィリップ・ロスは破天荒な長編 (原題は『Great Amer

ican Novel) で架空のメジャーリーグ愛国リーグと本拠地を失ったマンデイスというメジャー球団を創作。選手・審判・オーナーたちのハチャメチャな行状を通して、一筋縄では納まらない大国「アメリカ」の本質とは「何か？」を描き出そうとした。一方、野球小説を数多く残したW・P・キンセラは、民主主義、西部開拓、経済成長、戦争、黒人差別、暴動……と様々な様相を見せてきたアメリカの歴史で「全く変わらないものが野球だった」と書き、野球記者あがりの作家ロジャー・カンは、野球を「アメリカの父子相伝の文化」と表した。

現在は女子野球もあるので「親子相伝」と言うべきだが、世界一の経済軍事大国の複雑な歴史のなかで、野球だけは誰もが信じるに足る平和な存在だったようだ。

そんな野球の本質を日本人も理解していたのだろう。子供雑誌の表紙を数多く手掛けた画家の玉井力三は、ヤンキースの大スター、ディマジオ父子の姿を巨大なヤンキースタジアムを背景に描いた。

まだ硝煙の匂いが漂っているような終戦直後の社会で、日本の少年たちもアメリカ野球への純粋な憧憬を募らせたに違いない。(『少年ジャイアンツ』昭和25年7月号)



画・玉井力三

玉井力三「ジョー・ディマジオ父子とヤンキースタジアム」